

博士論文 要旨

題目「哲学のオルガノン」についての考察 ——アリストテレス、カント、シェリング、ヤスパーズにおける藝術哲学と形而上学——

氏名 伊野 連

本論文は序説と四つの部、そして結論から成る。

序説は「哲学のオルガノン」とは何かという問題設定を、本論の進行を先取りしておこなうものである。「オルガノン」の概念史、アリストテレス、カント、シェリング、ヤスパーズという四人の哲学者の立場、哲学的論理学と藝術形而上学との本質的関わりについて確認する。「オルガノン」がたんなる「道具」「機関」の意を超えて、哲学的な方法論、さまざまな哲学的思索に通底する論理的な性質、藝術を形而上学的に捉える思索上の原動力と理解することで、先の四人の哲学者の思想がはじめて有機的な繋がりをもってあらわれてくる。

第一部は本論の前提となる、古代と近世の「オルガノン」観について整理したものである。アリストテレス哲学における論理学（オルガノン）の意義とは、言語をめぐる形而上学的な議論を現出する本質的な手段である。したがって、アリストテレスにおいて、論理学と形而上学とは不可分である。それを二〇世紀において明確に示したのがハイデガーのアリストテレス解釈である。近世初頭、そのアリストテレスに象徴される旧来の思想を刷新せんとして示されたのが、F・ベイコンの「新オルガノン」構想である。ベイコンは経験をもって自然を語るためには、従来のアリストテレスのオルガノンでは方法論として不十分であると考えて、彼特有の帰納法を提唱した。ここから近世・近代に固有の思索は始まった。ベイコンの「オルガノン」理念はJ・H・ランベルトやカント、フィヒテ、シェリング、さらにはフッサールやもちろんヤスパーズらに受け継がれ、今日に至っている。

第二部は近代ドイツ精神哲学の巨人であるカントとシェリング、および彼らを継承する二〇世紀ドイツ哲学の巨人であるヤスパーズについて、「哲学のオルガノン」という共通の問題意識がいかにか彼らの形而上学・哲学的論理学・藝術哲学にあらわれているかを検証する。カントの批判哲学は、たんなる論理学にとどまる「オルガノン」ではなく、理論理性と実践理性とが目的論において総合されるという過程としての「オルガノン」を追究するものであった。とくに本論文では、カントの『純粹理性批判』のうちにみられるアリストテレス「オルガノン」の影響と、カントからのシェリングやヤスパーズへの強い影響との双方について、カントをめぐる考察する。次にシェリングについては、初期の主著『超越論的観念論の体系』における「哲学のオルガノン」としての藝術に関する理解を検証し、カント『判断力批判』と照らし合わせることで、近代から現代に至る藝術哲学における「暗号文字の解読」という思想系譜を浮かび上がらせる。そして、それを二〇世紀において総合したのが、ヤスパーズである。ヤスパーズによって藝術哲学は藝術の形而上学として確立された。藝術というもともと感性的なものをあえて形而上学的に捉え、しかしそれによ

ってはじめてその本質に迫ることができたのが、ヤスパースにおける「暗号による藝術形而上学」なのである。ヤスパースにおいては、藝術哲学と形而上学、そして本来の意味での「哲学的論理学」とが、一体となっている。この哲学的論理学へのまなざしは、本論文では第四部へと結びついている。

第三部は「哲学のオルガノン」が「哲学的構想力」として考察された過程を、カント、シェリング、そして本論文の検証において補足的に、彼らを繋ぐ位置にあるフィヒテについて、概観する。カントの超越論的構想力は、当初の「直観 - 悟性」という二元論的構造を説明するうえでの仮説概念から（『純粹理性批判』）、「直観的悟性」というより自由で活動的なはたらきとして（『判断力批判』）、大きく展開していく。フィヒテの「独立能動性」はその性質の点でカントからの系譜にある。フィヒテはさらに「浮動する構想力」について語り、こうしたカントとフィヒテの方法論を受け容れ、独自のものとしたのがシェリングである。彼においては、知的直観がきわめて重要な働きをみせている。この知的直観が、カントにおける直観的悟性に通ずるものであることは、ヘーゲルも承認している。さらにヘーゲルは、それらはすべて「理性」に帰するものであると看破し、この時代の哲学に新たな方向づけをおこなった。その最も適格な継承者は、「理性のオルガノン」を標榜したヤスパースなのである。また、カントの超越論的統覚論はさまざまな議論を喚起したが、なかでもとくに影響力の強かったハイデガーによる批判と、さらにそのカントとハイデガーを根本的に批判したフッサールによる受動的綜合による発生的現象学からのアプローチは、現在における最も本質的な議論として採り上げるべき価値がある。補足的に、カントにおけるアリストテレス「オルガノン」の要素として、「トピカ」と「図式」について整理する。

第四部はヤスパースにおける、哲学的論理学と藝術哲学の意義を確認する。哲学的論理学が「オルガノン」を介して藝術哲学と通じていることは、まさにヤスパース哲学の本質である。そこでは「理性」が最も根本的な働きをみせ、「哲学的思弁」が本来の意味で理解されている。著書『悲劇的なものについて』は哲学的論理学と藝術形而上学とが一つであることの実証である。

結論として、「哲学のオルガノン」が、アリストテレスにおいて存在論と形而上学との本質的契機としてあらわれていたこと、近世以降の方法論としてさまざまな哲学者によって自覚的に追究されてきたこと、近代ドイツ精神哲学では「哲学的構想力」として展開されてきたこと、ヤスパースに至ってはその働きにより哲学的論理学と藝術哲学とが一体となっていること、これらが確認できた。「哲学のオルガノン」というテーマに関しては時代も人物もきわめて広汎であり、古代哲学から現代哲学まで広い視野をもって取り組むことで、はじめてしかるべき成果が得られたのである。